
成り代わりだけど平行世界

蒼白く燃える鬼火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

成り代わりだけど平行世界

【Nコード】

N3266P

【作者名】

蒼白く燃える鬼火

【あらすじ】

気付けばポケスペ世界にトリップしていた現代人女性。しかも何か縮んでるし主人公の一人レッドに成り代わり！？

でもよくよく見てみれば漫画ポケスペとは違う部分がちらほら。あれ、平行世界？

ポケスペの世界だけど漫画ポケスペそのものじゃない世界で、面倒くさがりの主人公がのんびんだらりと過ごす事を願いつつ周囲の行動に巻き込まれていく話……な筈。

マサラタウンのレッド ー 1 (前書き)

ポケモン知識は赤緑青黄（一応プレイ済み）と金銀（借り物を軽くプレイした程度）とポケスペ（15巻以降未所持）しか無いくせにWikiとか攻略サイトを参考に書き始めた無謀者がここにいます。ポケスペ世界にトリップしたらどうなるかな、と考えたのが運の尽きでしたw

マサラタウンのレッド ー 1

カントー地方、マサラタウン。

日当たりの良い草原で、猫のように丸まって眠る小さな人影が一人。その傍らにはウィンディとキュウコン。二匹とも、眠る子供を守るように寄り添っている。キュウコンの尾が子供の枕や掛け布団のようになっているのはマサラでは馴染みの光景だ。

ふと、二匹は揃って顔を上げる。しんなりと目を細めて見据える先から、眠る子供と同じ年ぐらいの少年が駆けてきた。

「レッ……寝てるのか」

勢いよく駆けて来た男の子は、その勢いのままに声を上げかけ、二匹の鋭い目線に慌てて口を両手でふさいだ。友人曰くの「かほご」であるらしいこの二匹は、友人の眠りを邪魔するものを許さない。前に一度、ふざけてちょっかいを出した野性のオニスズメがほのおのうず×2で火達磨にされていたのは記憶に新しい。あれは怖かった。

くうくうと気持ちよさそうにキュウコンの尾に埋まって寝ている年上の友人を見る。本当は色々と聞きたい事や話したい事があったのだが、これでは無理そうだと男の子——シルバーは思った。レッドと言う三つ年上の友人はとてもよく寝る。自宅だけでなく、草原でも学校の教室でもどこでも。シルバーがレッドを見つけるのも

殆ど寝てる姿で、見つけた時点で起きていた事は五回に一回ぐらいしかない。

しょうがないから、その場に座って起きるのを待つ。

レッドと同じ年の姉・ブルーへの誕生日プレゼントの相談をしようと思ったのだが、無理に起こすと番犬よろしくシルバーの一挙手一投足を見つめている二匹が怖い。人間相手にわざを使うなどレッドが常々言い聞かせてあるから、いきなりわざを食らう事はないだろうけれど、間違いなく潰されるだろう自信があった。何せ二匹ともまだ五歳のシルバーよりはるかに大きいのだから。

「……あれえ？ シルバー？」

「起きたか」

「おはよう、何時からいたの？」

「もうじき夕方だからその挨拶は変だぞ。ついさっきだ」

五歳に見えないぐらい口の回るシルバーに、レッドは寝起きの目を細めつつ上体を起こした。尾を枕と布団にしていたキュウコンに礼を言うのも忘れない。

「何か用事？」

「……姉さんの、誕生日が近いんだ」

「？………ああ、プレゼント選び？ シルバーが選んだ物なら、何でも喜ぶと思うけどなあ」

ウィンディの胴体に寄りかかって、またうとうとし始めながらもレッドはちゃんと答えをくれる。

確かに、ブルーは弟である自分をとて可愛がってくれているから、一生懸命選んだ物なら何でも喜んでくれるだろうと言う事はシルバーにもわかる。でも、やっぱり贈るなら一番良い物を贈りたい

のだ。大好きな、たった一人の姉なのだから。

「お小遣い、いくら使えるの？」

「700円」

「んー、広場近くの雑貨屋さんに、ブルーが好きそうな小物があつたよ」

「そうか、ありがとう」

きちんとお礼を言って、すつくと立ち上がったシルバーは、歩き出そうとした所で後ろに引っ張られてたたらを踏んだ。

生来のあまり宜しくない目付きを更に悪くして振り返ると、キュウコンとウィンディとモンスターボールに戻したレッドがにへらと笑った。握られたままの左手を思いっきり前に引っ張ると、勢いで立ち上がったレッドが今度は数歩たたらを踏む。

「俺も一緒に選ぶよ。で、一緒に買お」

「……高いのか？」

「子供のお財布にはこうかはばつぐんだねえ」

む、と寄せられた眉間の皺を一撫でして、レッドはさっさと歩き出す。まだ小柄なシルバーは容易く引っ張られてしまって、なんとなく悔しいと思った。

「シルバー？どしたの？」

「……なんでもない」

不思議そうに振り返ったレッドの眼差しは、どこか姉のものと似ていて、でもやっぱり違って、シルバーはちよつと照れくさくなる。でもそれを口に出せるほど素直にはなれないから、足を速めて追い抜いて、急かすように引っ張った。

「そんなに急がなくてもいいと思うよ」

「……店が閉まる」

「まだ大丈夫だよ」

「……可愛いのがなくなると困る」

「ああ、それはそうだねえ」

ほとんど駆け足になっているシルバーを止める事無く、レッドは手を引っ張られながらゆったり走り続ける。どうしてシルバーが走っているのか、理由はさっぱりわかっていない様子だったけれど、ちゃんと走ってついて来てくれているから、まあいいかと手を引っ張り続けながらシルバーは思った。

マサラタウンのレッド ー 1 (後書き)

ポケスペ世界だけどちよつと違うポケスペ世界。

いわゆるパラレルワールドです。だから青銀が普通に姉弟W
緑君もそのうち出る予定

マサラタウンのレッド ー 2 (前書き)

wikiや攻略、考察サイトにて勉強中。

タイプ一致とか固体値、性格はまだいいとして、努力値って何？って感じです。

検証した人すげえ、と思いつつ勉強する今日この頃。

マサラタウンのレッド ー 2

色違いの飾りがついた髪留めを手にとって、うんうん唸っているシルバーを一步離れた所でレッドが微笑ましげに見つめている。大好きな姉の為に一生懸命になれるこの年下の少年を、レッドはわりと気に入っている。

レッドは、元々はマサラタウンの住人ではない。突き詰めて言えば、この世界の住人ですらない。

気が付いたら大量のモンスターボールと多種多様なポケモン達に囲まれて、見知らぬ草原にぽつんと一人で座っていたのだ。だからレッドに、肉親と呼べる存在はいない。いるかもしれないが、知らない。

最初にこの世界を正しく認識した時、レッドは軽くパニックを起こした。何せポケモンの言葉がわかるし、某漫画のようにポケモン達を癒して記憶を読み取る事が出来たのだ。これで驚かずに何で驚けと言うのか。

茫然自失としていたレッドを拾って、「レッド」と言う名前をくれたのは何だか面白いおじさんだった。連れて行かれた先がマサラタウンで、名前が「レッド」。ここでレッドは二度目のパニックを起こした。ただし、今度は顔にも態度にも出さずに心の中で。

よく愛読していた漫画の、主人公の名前だった。すわ成り代わりか！？と思いきや、よく考えると自分は男ではなく女で、マサラには何故かブルーとシルバーが姉弟として仲良く暮らしていた。グリ

ーンはいなかったけれど、オーキド博士はいたから存在してはいるだろうと思っている。

結論として、彼女はここを愛読書のポケスペと似て異なるパラレルワールドだと認識した。そう考えた方が精神的にシヨックも少なかったし、何より気持ちに余裕が出来た。愛読書の世界の主人公に成り代わった訳ではないのなら、未来を気にして行動しなくてもよくなるのだから。

そして彼女はマサラタウンのレッドとして、沢山のポケモン達と一緒に暮らす事になった。後に冷静になって考えてみると、あの大量のモンスターボールに入っていたポケモン達は、みんな元いた世界で彼女が捕まえ、育てたポケモン達だった。だからなのか、彼らはレッドとなった彼女によく懐いている上に、かなり強い。

まあリーグ優勝した子達でもあるし、当然かなあと思いつつレッドは今のところバトルをした事がない。野生のポケモンは勝手に手持ちの子達が追い払ってしまうし、マサラには現在ポケモントレーナーがいらないからだ。面倒事は嫌いだから、挑まれても受けない気がするけれど。

「……ド、レッド！」

「ん？ああ、ごめん。ちょっと意識飛んでた。決まった？」

「決まらないから、両方買う。それなら、片方がおれからで、片方がレッドからになるだろう？」

「いいけど、お小遣い大丈夫？」

ぼんやりとマサラに来た経緯その他を思い返していたら、気付けば目の前に不機嫌なシルバーの顔があった。どうやら随分根気よく呼びかけてくれていたらしい。

色違いの可愛い髪留めは、結局選びきれなかったようで両方

とも購入しようと彼は言う。

ポケモンをゲームとして遊んでいた時に貯めたお金がこっちにもそのまま持っていていたから子供ながらにお金があるレッドと違い、シルバーは毎月のお小遣いが決まっている。髪留めのお値段は子供のお小遣いからすれば実に素敵だったから心配したレッドに、シルバーは大丈夫だと言った。

「両方は無理だけど、片方だけなら買える。ちゃんと確認した」「そう？じゃあ、そっちは俺が買ってくるね」

片方の髪留めを受け取って、レジでプレゼント用に包んでもらう。買い求めた髪留めは、自宅に置いておくで見つかるからと言う理由でレッドが預かる事になった。

「レッドはこう言うの着けないのか？」

「あんまり興味ないねえ。髪も短いから似合うとも思わないし」

「……そうでもないと思うけどな」

「ん？」

「なんでもない」

ボーイッシュな動きやすい服装を好む彼女は、髪も男の子のように短く切っている。ブルーがことあるごとにレッドの髪を見ては勿体無いとこぼしているのを、シルバーは知っていたし、シルバー自身も伸ばせばいいのと思っていた。姉と同じような、さらさらの綺麗な髪だから。

家の並びの関係からレッドに送られて帰宅した彼が、待ち構えていた姉からあれこれ質問攻めにされるのは数分後の事だった。

マサラタウンのレッド ー 2 (後書き)

どこまでポケスペと似さすか、違いを出すかでまだ悩んでいます。
ワタルとか四天王とか。

何はともあれ、シルバーが実に書きやすいです W

マサラタウンのレッド ー 3 (前書き)

経験はないけどwikiや攻略サイトなどで勉強して書いていこう
と思います。

地名もできるだけ忠実に心がけてますが……ひらがなでよかった
よなあとwikiを見返してみたり(苦笑)

マサラタウンのレッド ー 3

ぽかぽか陽気の昼下がり。今日も今日とてレッドはのんびんだらりと惰眠を貪って……いなかった。

珍しく、ウィンディの背に乗って1ばんどうろを何かを捜すようにきよろきよろしながら疾走している。飛び出してくる野生のポケモン達は、すべてウィンディのほえるであっさり逃亡して行った。

「……いないね。もっと奥に行っちゃったのかな。ウィンディ、どう？」

『匂いが薄い。通って大分時間が経ってるぞ』

「そか。じゃ、もうちょっと奥行ってみよう」

言葉を交わす間にも、飛び出してきたコラッタがほえるを食らって一目散にすっ飛んで逃げていく。逃げるぐらいなら出てくるな、とはウィンディの言である。レベル差がありすぎるから当然の結果だし、飛び出してくるのは野生の習性だからしょうがないよとレッドは苦笑する。

今、レッドとウィンディはシルバーを捜している。

ポケモントレーナーならいざ知らず、ポケモンを連れていない五歳の子供が街の外を歩くのは危険すぎるから、現在マサラでポケモンを扱えるレッドと、ポケモンの権威オーキド博士が手分けして1ばんどうろを捜しているのだ。街中は、ブルーや他の大人達が捜索している。

「そんなに嫌な事言われたのかなあ？」

『知らんよ。……他人にどれだけくだらなく聞こえても、あの小僧には重大な事だったのかも知れんしな』

喧嘩をしたのだと聞いた。数人の、同い年の男の子達と。

シルバーは小柄なわりに喧嘩が上手い。いつもはブルー仕込みの口八丁で喧嘩にすら持つていかずに勝利を収めるが、たまに相手が手を出してきても余裕で返り討ちにするぐらいには強かった。

そんな彼が、相手を言い負かすことも、手を出す事もせず、たった一人で1ばんどうろへ足を踏み入れた理由が、レッドにはわからない。

「……早く見つけよう。ブルーが泣いてる」

『そうだな』

シルバーがいらない、シルバーがいないと半狂乱になって街中を探し回る友人を思い出して眉をひそめる。ポケモンを持っていたら、多分ブルーも周囲がどれだけ止めても一目散に1ばんどうろへと繰り出しただろう。それ程に、ブルーはシルバーを大事にしている。

ほんの少し、シルバーが羨ましいとレッドは思う。ポケモン達はみんな優しいし温かいけれど、やっぱり時折肉親が恋しくなる。

『見つけた。近いぞ』

くん、とウィンディが一気に速度を上げる。

向かった先に確かにシルバーはいたけれど、何故かポチエナの大群十数匹のグラエナに囲まれていた。

「ここにグラエナなんていたっけ!？」

『俺が知るかあ!』

驚きつつ進化したてだったらしいグラエナを蹴散らして、ウィンディはシルバーと野生のポケモン達の間割って入る。身軽に飛び降りたレッドは、驚くシルバーに笑みを向けると問答無用で耳を塞いだ。

直後、ウィンディが大音量でほえる。

蜘蛛の子を散らすように逃げ去っていくグラエナとポチエナの群れを見送って、レッドはシルバーの耳から手を放した。

「大丈夫？」

「……レッド？」

「うん、怪我はなさそうだね。……ブルーが心配してたよ。早く帰ろう」

ウィンディの背に跨りなおして手を伸ばす。しかし、シルバーは動かない。怪我は無かった筈なのにと首をかしげるレッドに、シルバーはぼそぼそと帰れないと言った。

「姉さんがくれたペンダント、あいつらが無理やり取ろうとして、すっぱ抜けたのを野生ポケモンが持ってたんだ」

「あー、あの青い石のついたペンダント？三人色違いでお揃いとかブルーが言ってた」

ちなみにブルーのは赤い石で、レッドのは白っぽい灰色の石がついている。流石に銀色の石はなかったらしい。

レッドの問いに、シルバーは今にも泣きそうな顔で頷いた。

「……ウィンディ」

『俺だけで探せてか』

「他の子出すと説明が面倒になるんだよ」

ぼそぼそと小声でやり取りをしている間も、シルバーは周辺をさがさそ探していてこっちを気にする様子は無い。こんな風にずーつとがさごそしながら進んできて、途中でポチエナの縄張りに入り込み、起こしてしまったんだろう。

ウィンディの鼻を頼りに探した結果、比較的あっさりシルバーのペンダントは見つけた。ただし、その分だけマサラに戻るのに時間がかかり、ブルーやオーキド博士から盛大に雷を頂戴する事となった。

マサラタウンのレッド ー 3 (後書き)

たまにはのんびんだらりじゃない時もあります。

基本的にのんびんだらり。けど友達が大変な時は動く子です。

マサラタウンのレッド ー 4 (前書き)

あれやこれやを捏造しつつ書くのは楽しいけど大変です。

常々レッドが野外で眠る時にお世話になるキュウコンとウィンデ
イは、地元マサラの子供達にも非常に人気がある。何せふかふかの
もふもふだ。レッドの睡眠を阻害したり毛を引っ張ったりしなけれ
ば、二匹ともあつさりと寄りかからせてくれる。

レッドと一緒に、キュウコンのふかふかの尾に埋もれているブル
ーはご満悦だ。シルバーは宿題が終わってからくるらしい。

「ねえ、レッド」

「ん〜？」

「もう来年だけど、どうするの？」

「んー……まあ旅立つのに異論はないかなあ」

「ポケモンマスター目指す気は無い訳ね」

「全然ないねえ」

基本的にレッドは面倒くさがりだ。仲の良いポケモン達と、のん
べんだらりと暮らせたならそれでいいと思っている。彼女がマサラに
来てから付き合いのあるブルーは、そこら辺をきちっと察している
ようで、しょうがないなと言う顔で苦笑するだけだ。

マサラには、と言うかこの世界には、ポケモンを捕獲・育成でき
るのは小学校卒業してから、と言う一風変わった法律がある。勿論、
中学校や高校、大学もあって、卒業後にポケモントレーナーとして
旅立つか、中学に進学するかは本人の自由だ。

ちなみに、レッドのように既に捕獲済みのポケモンと一緒に暮らしているのは法律違反ではない。おそらく、自分をマサラに連れてきたあの屈強な大人が捕獲したポケモンだと思われたんだろうなあとレッドは思っている。ややこしくなるから確かめた事は無いが。

「補助金とか、出るしねえ」

「そうね。……ね、ポケモン捕まえられるようになったら、手伝ってくれない？ シルバーに何匹か残していつてあげたいのよ。私が旅に出たら、一人になっちゃうし」

「……ん、いーよ」

半分寝ている状態での返事だったが、ブルーは文句を言わなかった。この状態でも、レッドが交わした約束をきちんと覚えていると知っているからだ。

小学校を卒業し、ポケモントレーナーを目指して旅に出る子供達には、ポケモン協会から一匹のポケモンと数個のモンスターボール、そして少量のお金が支給される。流石に10歳の子供を着の身着のままでぽんと放り出すほど鬼ではないし、そんなのは無謀だ。広い世界を見て回る事に繋がるから、旅立つ子供を止める大人は殆どおらず、むしろ積極的に旅立ちの準備に協力する事が多い。主に金銭面で。

マサラにはポケモン権威のオーキド博士の研究所があるから、他の町より珍しいポケモンが最初の仲間としてもらえる可能性が高いとブルーがわくわくしているのをレッドは知っていた。

「そう言えば、博士の孫、戻ってくるらしいわよ」

「……孫？」

「そう。私たちと同じ年。グリーンって言うんだけど、すっつつつごく生意気なの」

かなり長くためた事でブルーのグリーンへの感情が透けて見えて、レッドは淡く苦笑した。七歳あたりで留学したらしいから、レッドは面識が無いが、物心付いてからだから長くて四年ぐらいだろうに、ブルーのグリーンへの心証はあまり宜しくないらしい。

「気に入らないのよ」

何故かと問えばきっぱり言い切ってくれた。

「あいつにだけは絶対負けたくないわ」

「……燃えてるねえ」

「レッドもよ！あいつにだけは負けちゃだめだからね！」

何故か火の粉がこっちにも飛んできた。

これだけ嫌われてるグリーンって一体……と、ちょっと遠い目をしてしまったレッドである。

その後、やっと宿題を終わらせてやってきたシルバーを交え、三人で日向ぼっこを楽しんだ。

専用ブラシで枕になってくれていたキュウコンの尻尾を丁寧にブラッシングしてからボールに戻す。帰り道、話題に上がったのは来年の旅立ちのことで、シルバーは寂しそうな顔をしたもののブルーを止めようとはしなかった。

マサラタウンのレッド — 4 (後書き)

ポケモン関係の決まりはほぼ捏造。

Wikiとか調べたりしてるんですけど、まあパラレルワールドだからって事でひとつ

マサラタウンのレッド ― 5 (前書き)

そろそろ真面目に題名考えなきゃなあと思いつつ……
惰性で続いています。いい題名が思い浮かばない (汗)

マサラタウンのレッド ー 5

時は流れて旅立ちの日。

ブルーは、朝食を済ませるとシルバーを伴ってレッドの家に来ていた。

呼び鈴を鳴らすと、応答の声はなかったものの、暫くしてから鍵が外れてドアが開く。最初は驚いたブルー達だったが、今はもう慣れたもので「お邪魔します」と挨拶するとあっさり家の中に足を踏み入れた。リビングまで行くと、予想通りまだ半分以上眠ったままの状態のレッドをエスパーポケモンが丁寧に動かして食事をさせている最中だった。

「今日は旅立ちの日だから、早起きは無理でも早寝して、ちゃんと起きなさいよって言っただけなのに……あら、ありがと。おはよう、みんな」

「……おはよう。ありがとう」

ふよつと目の前に漂ってきたマグカップを、ブルーとシルバーはそれぞれ礼と挨拶を言っただけで受け取り、適当な場所に座る。中身は温かいココアで、ゆっくりと飲みながらレッドの目が覚めるのを待つ。子供の手には大きめのマグカップが空になる頃、漸くそれまでぼんやりと虚空を彷徨っていた視線がブルー達に定まった。

「……ブルーとシルバーがいる」

「おはよう、ねぼすけさん。そりゃいるわよ。今日は旅立ちの日だ

から、一緒にオーキド博士の所に行きましょって言っただけでしょ」

「おはよう。俺は姉さんに引っ張ってこられたんだ」

「……おはよう。……あー、今日だっけ……」

話の途中でかくんと舟を漕いだレッドは、待ち構えるようにそこにあつた水入り洗面器に顔面から突っ込んだ。これもまた、朝の約束なのでブルーもシルバーも焦らずただ見ている。ねんりきで浮かされている洗面器は落ちる事も水をこぼす事も無く、一分ぐらいして顔を上げたレッドの顔に、今度はタオルが飛んできた。

「……みんなありがと、もう平気だよ。おはよう、二人とも」

「相変わらず朝弱いだね」

呆れた様子を隠しもしないブルーに、レッドは苦笑しながら柔らかいタオルで顔を拭く。前髪の水分も軽くとってからテーブルに置いたタオルは、次の瞬間忽然と消えた。テレポートで持っていかけたタオルは、今頃は洗濯機の中だろう。

家事万能なポケモン達に、ブルーは感嘆の息しか出てこない。驚愕なんて、最初の数回でやり尽くしてしまつて、もう「レッドのポケモンだから」はブルーとシルバー共通の合言葉だ。何でもあるすぎて、いちいち驚いていたらやっていけない。

「さあ、博士の所に行くわよ！」

「……元気だねえ、ブルーは」

「姉さん、ずっと楽しみにしてたから」

「……そうだね」

いつものようにポケモン達に留守を任せ、ズンズンと先に行くブルーの背を追いかける。背中越しでも彼女がわくわくしているのが十二分に伝わってきて、レッドはひっそり目を細めた。ポケモンが

大好きで、優秀なトレーナーになりたいと常々言っているブルーが、自分の相棒とも言えるポケモンと出会える今日をどれだけ楽しみにしてたのか、レッドもシルバーもよく知っている。

「博士ー、おはようございまーす！」

「おお、来たか。おはよう、今日も元気じゃのう」

オーキド博士の研究所は、ポケモンを自然のままで観察したいと言う博士の意思で、研究棟自体は非常にちんまりしている。その分、柵に囲われた内側は自然豊かで、博士が捕まえたポケモンだけでなく、時々野生のポケモンが入り込んでそのまま暮らしていたりする。風が吹き抜ける草原のように見える一角は、レッドも大好きだった。どのポケモンも生き生きと幸せそうに見えるから。

「うーん、どの子も可愛い……どの子にしよう」

ゼニガメ・ヒトカゲ・フシギダネの三匹が入ったモンスターボールを前に、ブルーは真剣な顔で悩んでいる。特に拘りのないレッドはブルーが決めるのを待っていたのだが、横合いから伸びてきた手が迷いなくヒトカゲのボールを取った。

「グリーン！何すんのよ、まだ私が選んでたのに！」

「……うるさい女だな」

「何ですって！？」

「俺は前々からヒトカゲを連れて行くと決めてたんだ。早い者勝ちだ」

今にも掴みかかりそうな勢いのブルーをあっさりスルーして、グリーンと呼ばれた茶髪の男の子はチラッとレッドとシルバーを一瞥すると背を向けて去って行った。早速1ばんどうろへ行くつもりら

しい。

「すまんなあ。どうもグリーンは人付き合いが苦手なようだな」

「博士のせいじゃないでしょ。無愛想なあいつが悪いのよ。あー、腹立つつたら！」

「まあまあ。……博士、その機械は？」

「ああ、これはポケモン図鑑。出会ったポケモンや捕まえたポケモンのデータを記録していく機械じゃよ。君達の旅立ちに合わせて大急ぎで作ったんじゃない。持って行ってくれ」

若干ムスツとしたままのブルーの気を逸らすべく、レッドはオーキド博士が持っている手帳のような機械に目を向けた。説明の後、それぞれ手渡された図鑑に少し浮上したブルーの機嫌は、グリーンも持っていると聞いて再度下降した。

どうしたものかと苦笑するレッドに、シルバーは何をやっても無駄だと首を横に振る。

「犬猿の仲って奴だよ」

「……難しい言葉知ってるねえ」

「じっくりくる言葉がなかったから、調べた」

ひょいと肩を竦めて見せるシルバーと、親の敵のように図鑑を睨むブルーを交互に見て、レッドはそっとため息をついた。これはシルバーの為にポケモンを捕まえに行くのは時間がかかりそうだと思っ
いながら。

マサラタウンのレッド ― 5 (後書き)

シルバー少年はあまりに姉とグリーンが衝突（でもわめくのはブルーのみW）するから辞書を引きましたW

マサラタウンのレッド ー 6 (前書き)

平行世界設定ですが、たまに原作っぽい部分も出ます。

まあまだ15巻までしか持っていないので出せてもそこまでですがW

ブルーがゼニガメを選んだから、最後に残ったフシギダネを相棒として連れて行くようにとオーキド博士に言われたものの、すでに努力値振りが終わっているレベル100のポケモンを複数持っているレッドはどうしたものかと考えていた。

互いの図鑑にゼニガメとフシギダネのデータを登録した後、1ぱんどうろで捕まえたポチエナをシルバーに渡して、レッドの自宅に戻りつつフシギダネを譲ろうとしたがブルーは頑として聞き入れない。自分の仲間は、自分で捕まえて育てていくと言い切った彼女に、レッドはそれ以上フシギダネを勧めようとはしなかった。また地道に努力値振りかな、とボールの外が珍しいのかきよろきよろしならついて来るフシギダネを見つつ思う。

「ところでレッド、あんたの家に戻ってどうするの？」
「……データだけでも埋めといたら楽かと思って。一杯いるし、うち」

図鑑を軽く掲げて見せると、ブルーは納得顔で頷いた後、にんまりと笑みを浮かべた。旅立ち初日から、図鑑の内容でグリーンに勝てるのが嬉しいらしい。シルバーがいたら何か突っ込みいれてくれるかなあと、レッドは学校に行ってしまった年下の友人を思った。

自宅に戻り、ブルーが図鑑にポケモン達を登録している間に、連れて行く子と留守番する子、ボールのままでいざと言う時に通信で入れ替える子等を決めていく。

「……ふう、登録完了。ほんとに多いわね、レッドの家族」

「うん」

「私はまず真っ直ぐトキワシテイを目指すつもりだけど、レッドどうするの？」

「のんびり行くよ」

のほほんと答えるレッドに、言うと思ったとブルーは返した。

改めて家を出たレッドのベルトにはモンスターボールがきちんと装着されている。連れているのはウインディ、キュウコン、スターミー、プテラ。貰ったばかりのフシギダネはボールの外だ。実はひっそりとサーナイトのモンスターボールも持っているが、これはいざと言う時の切り札だからブルーにも言っていない。

「あら、ブルーちゃんにレッドちゃん。これから行くの？」

「こんにちは、ナナミさん。はい、準備も終わったので」

「そう。何だか変な人達がいたらしいから気をつけてね」

「大丈夫ですよ。レッドのポケモンは強いですもん」

「うふふ、そうね。でも、小さい子達が寂しがるわね。ウインディとキュウコンは連れて行くんでしょう？」

「ピジョットやエビワラー達を置いて行くらしいし、たまに入れ替えるって言っていましたよ。ね？レッド」

「……うん」

レッドは人見知りではないが、あまり喋るのは上手くない。どうしても受け答えに一定の間が空くから、大人との会話は実は苦手としているのをブルーもマサラタウンの住民達も知っていた。だから一緒にいる時はブルーが代わりに沢山喋る。何とかしないとあつたレッドとしても思わない事もないのだけれど、こればかりはなかなか改善できそうになかった。

ナナミと別れ、1ばんどうろの入り口に向かっていた二人は、揃いの黒服を着た大人達を見つけた。

明らかにマサラの住民ではない彼らは、一様に腰にモンスターボールをつけ、どこかピリピリとした雰囲気放っている。

「ナナミさんが言ってた変な奴らってあいつらかしら？」

「……っばいね」

どう見ても堅気じゃない連中に見つからないようにブルーがそっと近付いて行く。元々この辺りはシルバーやポケモン達とかくれんぼとかをして遊んでいた場所なので、どこにどう言う隠れ場所があるのかブルーもレッドも熟知していた。茂った草に隠れて近付いて、聞き耳を立てる。

怪しい格好の大人達が駆け去った後、ブルーとレッドは草むらから出て顔を見合わせた。

「西側の森に幻のポケモン？聞いた事ないわね」

「……幻ってぐらいだし、滅多に現れないんじゃない？」

「なるほどね。ね、レッド、行ってみましょ。西の森」

「……捕まえるの？」

「んー、それは出来たらいいわ。それより、あんな怪しい連中が捕まえたら大変なもの」

ブルーの言葉に、こくんと頷く。でかかとRの文字がプリントされた怪しい服を着ていた大人達が、可愛がる為に幻のポケモンを捕まえようとしているのではない事を元異世界人のレッドは知っていた。

マサラタウンのレッド — 6 (後書き)

主人公がのんびんだらりを発揮できるのは何時になるやら……

マサラタウンのレッド ー 7 (前書き)

やつとミュウ登場。

ちなみにポケスペ原作だと一巻のかなり早い段階で出てきておりますW

マサラタウンのレッド ー 7

マサラタウン西の森。

きよろきよろと幻のポケモンを探しているブルーと違い、レッドは欠伸をかみ殺しながら歩いていた。如何にもやる気のなさそうな風情に見えて、実はしっかり周辺を見ている事がわかるのは今のところブルーとシルバーだけだ。

「……右奥、誰かがバトルしてる」

「え？……ほんとだ。って、ヒトカゲじゃないのよ！」

「ブルー、声がでかいよ」

思わず大声を上げたブルーをやんわり窘め、レッドはヒトカゲが攻撃を仕掛けている相手のポケモンを探す。少し離れた場所に、ちよこんと座っているイタチによく似た形のポケモンを見つけた。

「あら、可愛い」

「……そだね」

「何だ、お前らか」

「げ、グリーン」

いつの間に戦闘をやめたのか、ヒトカゲを従えたグリーンがすぐ近くに来ていた。気付いたブルーが非常に嫌そうな顔になる。見知らぬポケモンは、ヒトカゲが攻撃をやめるのと同時にいなくなつて

いた。

口論になりかけた二人の腕を、レッドがいきなり引っ張って木陰に隠れるように押し込む。文句を言おうとしたグリーンの口は、即座にブルーが手のひらを押し付けて塞いだ。

一拍置いて、今まで三人がいた場所にブルーとレッドが見た怪しい大人達がやって来る。

「本当にこの辺りか？」

「微弱なエスパーポケモンの反応があったが……移動した後のようだな」

「チッ、無駄足か。引き上げるぞ！」

揃いの衣装を纏った大人達が足早に去って行くのを見送って、ブルーがそろそろと詰めていた息を吐いた。まあ隠れていた木陰の向こうで屯されたら無理もないだろう。うっかり物音を立てていたら、きっと見つかっていただろうから。

「何だ？あいつらは」

「幻のポケモンを捕まえようとしてた怪しい大人達よ。邪魔出来て何よりだわ」

「ふうん。なんだ、てっきりお前達もあいつを捕まえに来たのかと思っただぜ」

「明らかにさっきのポケモンのが実力上じゃない。そこまで無謀じゃないわよ、幾らなんでも」

ブルーとグリーンが言い合いなのか情報交換なのかわからない会話をしている間、レッドはボーっと木の幹に背を預けてフシギダネやヒトカゲ、ゼニガメを撫でていた。

のんびんだらりが基本姿勢で、わりと何処でも睡魔に負けたら眠れてしまうレッドがうつらうつらと舟を漕ぎ始める頃、やっとブ

ルーが話を区切って振り向いた。

「レッド、ここで寝たら風邪引くわよ」

「……うん」

「何なんだ？こいつは」

「レッドよ。あんたが修行だか留学だかに出た後にマサラに来たの」
小動物のように眠たげに目を擦るレッドを、グリーンが不思議そうに見やる。今までマサラにいなかったタイプなのは明らかなので、ブルーは普通にレッドを紹介した。片手で口元を覆ってくあと短い欠伸をひとつして、レッドはグリーンの方を向いてふにやりと表情を緩める。

「……よろしくね」

「おい、大丈夫なのか？あんな奴が旅に出て」

「あら珍しいわね。あんたが他人を心配するなんて」

「うるさい、茶化すな。オレは真面目に聞いているんだ」

「はいはい。大丈夫よ、気を抜いていい場所と良くない場所はちゃんと心得てるし」

「……だといいがな」

フンと鼻で笑ってヒトカゲを呼ぶと、グリーンはさっさと歩み去った。

それに対して文句を言わずにレッドと連れ立って森から出ようとしているブルーが、あえてレッドのポケモンが強い事を言わずに、それを知った時のグリーンの反応を楽しみにしている事に気付いたのは、当然ながらレッドだけである。

「さて、と。それじゃ、私はこのままトキワを目指すわ」
「気をつけて」

「レッドもね。あんまりそこらでホイホイ寝ちゃ駄目よ？」

「……気をつける」

かりかりと頬をかきつつ頷いたレッドに、ブルーはくすくす笑った。どこでも寝ている風に見えるレッドだが、安全だと認識している場所じゃないと眠っていない事をブルーはちゃんと知っている。それでも釘を刺すのは、やはり心配だからだ。それを理解しているからこそ、レッドも素直に頷く。

ブルーと別れ、レッドはプテラのそらをとぶでフシギダネの為の努力値稼ぎに向かった。

こちらの世界ではマサラ以外に行った事がないレッドだが、ゲームの記憶を継いでいるのかそらをとぶが使えるポケモン達はカントーだけでなくジョウトにまで移動が可能だったりする。

本当は近場でもいいのだが、グリーン等の知り合いに見られた場合の言い訳を考えるのが面倒くさいから遠出を選んだレッドだった。

さて、フシギダネの最終形態はフシギバナ。特攻と特防の種族値はそこそこ高いけれど、素早さの種族値はさほど高くない。性格によつては速攻型育成も不可能ではないが、出来れば耐久型か両刀型に育てたいなあと思いつつ、まずは努力値稼ぎの参考にする為にフシギダネの性格を知る事から始める事にした。

マサラタウンのレッド ー 7 (後書き)

ポケスペのフッシーの性格って何だったっけ……とWikiをあさっております。

同じ性格にするかどうかは悩み中。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3266p/>

成り代わりだけど平行世界

2011年2月19日04時25分発行